

人)である。本町史編纂主任近藤寛二は近藤武平よりシベリア出兵のときの話を何度も聞いたという。ただし文書は残っていない。町民の中には他にも出兵した人がいると思われるが不明である。

このとき、阿波・麻植・美馬・三好の者は香川県善通寺の歩兵第四十三連隊に属し、大正九年九月二十六日・二十七日に託問湾から出発している。

第七節 善入寺島(粟島)の立退き

一 善入寺島と吉野川改修工事

善入寺島(古くは粟島)は吉野川とその支流善入寺川(古くは粟島川)との間にできた川中島である。ここには古くから人が住み、多くの農産物を生産してきた。大正時代、この島は旧柿島・土成・八幡・市場・川島・学などの町村に属していた。そして大正初期は約四三一ヘクタールの耕地に五〇六戸、三〇〇〇余人が住んでいた。忌部族が開拓したという古い歴史をもち、文化豊かな島であった。しかし吉野川の中洲であったこの島は、洪水のたびに人畜や農作物に大きな被害を受け続けてきた。島全体が水没することもあった。

吉野川改修工事が、明治十九年度以降十一年に亘る事業として着手され、大きな期待がかけられたが、明治二十二年度限りで折角の工事も打ち切りとなった。しかし、明治二十三年寅年の大洪水は粟



善入寺島の農家 (明治40年頃)

島の藍を水没しにし流出家屋が出るなど吉野川流域各地に多大の被害を与えた。また、明治三十五年九月の大洪水では渡船が転覆して八幡尋常高等小学校へ通学の女生徒五人が死亡する大惨事が起きたので、改修工事に對する要望は高まるばかりであった。

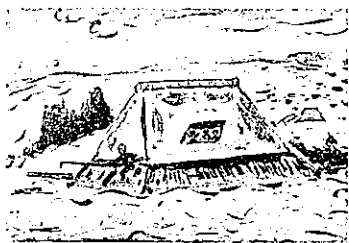
やがて、本格的な改修工事が実施され、善入寺島の遊水地化、島民の立退きと発展し、島民には大きい犠牲を強いることになった。

二 善入寺島の暮らしと旧蹟

1 島民の暮らしと水

善入寺島は周辺を川に囲まれているため、上流にダムの無かった時代つまり昭和の中頃までは、大洪水のたびに島全体が水没しになった。平常の吉野川は豊かに流れる清流が旅人の咽喉を潤し、荷物を運ぶ帆かけ舟が往来しその爽やかな眺めは風情があった。ところが善入寺島は河川の中州であり砂礫土であるため兩岸を大量の水が流れているがそれを利用することができず、そのため水稲作り不可能で陸稲や蔬菜の栽培、藍作がほとんどであった。

秋の台風期になると島民にとっての一番の悩みは如何にして台風による人畜の被害を最小限に食い止めるかであった。まず空の雲行きを見極めながらいよいよ台風が近づくと一番に男性は水に浸る処に置いてある肥料や農作物、食料品を高所に移す。女性は保存食(ハツタイ粉、



善入寺島(粟島)の大洪水 大塚唯士画

おちらしともいう。味噌・醤油・焼き米・にぎりめし・水などを屋根裏の
大和（一階の場合葦葺屋根の天井上に木を横に竹を乗せ土を厚さ一〇
センチの板のようにして乗せたもの）に持ち上げておいたという。
次に島民の思い出を掲げる。

私の幼少の頃大水のときは倉の二階で寝起きた。馬は内庭へ連れて来
た。家が二軒流れて行く、屋根の上に人がまたがって流されて行くのを小
学生の時見た。「助けて、助けて、」と大声を上げながら流されて行くが、
どろが（汚水）の水が大波を立てて流れているためどうすることもでき
ず見る見るうちに下流へ流されて行った。
（土成町の三原カメ子、粟島生まれ、八十九歳の談）

前須賀でいたが七歳の時移転した。周囲は藪で囲まれ十六戸いた。洪水
の時は舟に乗って水のひくのを待った。舟は大きいびわの木につないであ
った。大洪水のときは母屋の屋根の榎と水面との間が二〇センチしかなか
った。
（吉野町の大倉ヨシコ、粟島生まれ、八十八歳の談）

昔、粟島が大洪水のとき、農耕馬が水の中で苦しむので、住宅の床の上
に上げた。さらに水位が上がり足が立たなくなった馬の腹に、もつこを当
てて天井に吊し、馬は首を水面上に出していた、と父が語っていた。
（鴨島町高岡利明、元粟島に居住、の談）

2 善入寺島の旧蹟

善入寺島は吉野川改修工事のため住民が立退き、今は一軒の住家もな
い。昔は粟島村やその他の町村の家々があり、神社や寺もあった。旧蹟
を地図に示し、簡単な説明を加える。

⑦ 極楽塚

昔、善入寺島の宮島に極楽塚という墓穴があり、人帝が死ぬと死体を
ここへ投げ入れると成仏すると言われていた。神の島として墓を置か
なかったことが分かる。

⑧ 火薬庫跡

吉野川改修工事に使用した火薬貯蔵庫跡である。

⑨ 中須賀戎社跡

中須賀の戎さんでは毎年駒馬が行われ祭礼の名物であった。

⑩ 八條神社跡

八條神社は粟島村の村社で吉野川改修工事により粟島村にあった中須
賀戎社・高尾須賀戎社・西須賀三宝荒神・東北須賀愛宕神社と山神社の
六社を合祀、神社名を粟島神社と名付けて八幡町屋敷の八幡神社境内に
移転した。

⑪ 光明庵跡

光明庵は四国霊場番外札所といわれ、遍路は無料で渡した粟島渡船場
に近いことから無銭庵の別名がある。改修工事で吉野川右岸堤敷となり
庵は廃止された。本尊大師像は立派なもので大野寺に合祀されている。

⑫ 宝幢寺跡

延宝の大洪水で寺は流失した。本尊宝幢如来像は出水に備えて石仏で
あったため流失をまぬがれた。本寺の大野寺に合祀されている。

⑬ 地藏尊跡

東北須賀にあった地藏尊と庚申さんは切幡寺境内に一旦移転したが、
移転した村人が東島に再移転し、今日に至っている。

⑭ 金刀比羅宮跡

伊月前須賀の金刀比羅宮は、改修工事により伊月事代主神社に合祀し

3 善入寺島(粟島)の旧蹟説明

① 善入寺

大野寺の末寺で、その敷地は吉野川改修工事のため堤防敷となってい
る。現在の北岸用水路が堤を超えるあたりに南大門があった。寺本堂は
別掲のとおり地番附近にあったといわれている。

② 佐藤香雪塾跡

儒家佐藤香雪通称建吉、山川町川田で文化九年（一八一二）に生まれ
柴野碧海に学び江戸に出て古賀仙庵の門に入り昌平校に学び帰郷、天保
十四年（一八四三）藤太夫須賀へ招かれ塾を開いた。

③ 佐藤道場跡

佐藤家は原土で、武芸をもって知られ幕末期には壺三郎・半作・哲三
郎三兄弟は江戸の心形刀流伊庭道場で剣の奥儀をきわめて帰郷、門弟を
教えた。

④ 杉尾神社跡

香美本村から移祀してあったが、吉野川改修工事で香美八幡神社に合
祀した。

⑤ 中道神社

兎島須賀にあったこの神社は、大正五年七月一日、現川島町大字兎島
字前池北四九鎮守八幡神社に猿田彦神社とともに合祀する。

⑥ 宮島八幡宮

古代の忌部神社と言われ、別名浮島八幡宮という。川島城山の三分の
一位の高さの岩山の上にあつて洪水時浮上っていたのでこの名がつい
た。改修工事で境内にあつた東道神社は現川島神社境内へ移祀、宮島八
幡宮は川島城山に移転し川島神社と改名した。

粟島(善入寺島)旧蹟(後の地図参照)

番号	名称	場所
1	善入寺	市場町大字香美字善入寺322番地の3
2	佐藤香雪塾跡	河川敷古用地(吉野川)市場2区7号8号境界
3	佐藤道場	吉野川河川敷古用地市場3区14号11号境界
4	藤州小学校杉尾神社	吉野川河川敷古用地市場3区8号17・20号境界
5	中道神社	吉野川河川敷古用地学島4区49・50号境界
6	宮島八幡宮	吉野川河川敷古用地川島3区156号地
7	極楽塚	吉野川河川敷古用地川島3区69号地
8	火薬庫跡	吉野川河川敷古用地八幡2区120号地
9	中須賀戎社	吉野川河川敷古用地八幡4区86号地
10	八條神社	吉野川河川敷古用地八幡5区3号地
11	光明庵	粟島字前須賀1番地の4麻植郡鴨島町
12	宝幢寺	吉野川河川敷古用地八幡6区44号地
13	地藏尊	吉野川河川敷古用地八幡5区118号地
14	金刀比羅宮	吉野川河川敷古用地八幡7区45号地
15	阿女須賀	別名アメリカ栗島南東部

⑬ 阿女須賀

阿女須賀は粟島で一番低地帯であるが地味豊かであったので、三五戸
程人家があつたが、毎年の洪水で流失家屋が出た。島全体で三七戸も流
れたとき、この付近の家の大多数が流され、改修工事までに一戸も残ら
ず流失し、アメリカの平原のようになったところからアメリカといわれ
ている。

三 島民の立退き完了

1 吉野川改修工事と善入寺島

吉野川治水は多年の政治的課題であり、改修工事について、明治三十
九年工事国営案が国会を通過、明治四十年度から大正十年度に至る一五
か年継続事業として、工費予算八〇〇万円（内県負担二〇七万五〇〇〇

円)で、左岸阿波郡林村右岸麻植郡川田村以下海に至る約四十キロメートルに施行の計画であったが、第一次世界大戦の影響や関東大震災、その後の追加工事等のため工期が延期となり大正十五年度に及んだ。工費も増額され、総額二〇一萬六〇〇〇余円(内県負担三〇七萬九〇〇〇円)となった。

この計画の中に、善入寺島の買収、遊水地化が採り上げられた。内務省大阪土木出張所の「吉野川改修工事概説」によれば、当時、「全島約四百三十一町歩ノ耕地ヲ買収シ五百六戸ノ人家ヲ移転セシメタリ」と記録されている。

2 善入寺島の買収

明治四十二年春、内務省の工務課長大阪土木出張所長工学博士野野忠雄が来県し善入寺島を視察の際、吉野川治水上同島は早晩遊水地となることが必然であるから、島民は諒承して、立退きの心構えを以てもらいたいと述べて、政府買収の方針を発表した。

当時、旧八幡町に属する分は大野島宇木屋須賀・粟島(字前須賀を除く)。伊月字前須賀で、旧市場町分は藤太夫須賀が該当地区であった。島民の間では、長年住みなれた先祖伝来の墳墓の地であり、生来親しんできた隣人と別れを告げることは耐え難いとして、島外に出ることを拒む者が続出した。島民の中で、すみやかに政府に対して設計変更を陳情すべきであると主張する者が多数を占めたため、明治四十二年九月内務省へ設計変更陳情をすることとなり、江東多喜郎・大島寛太郎・今川嘉太郎・河村庄平・後藤田常太郎・中野芳太郎・杉野国三郎・佐藤永太郎・野口邦次郎・大塚牛太郎・沢田兼太郎等が代表として原知事に陳情した。また、明治四十二年十月二十日宮ノ島八幡神社で島民大会を開き、江東

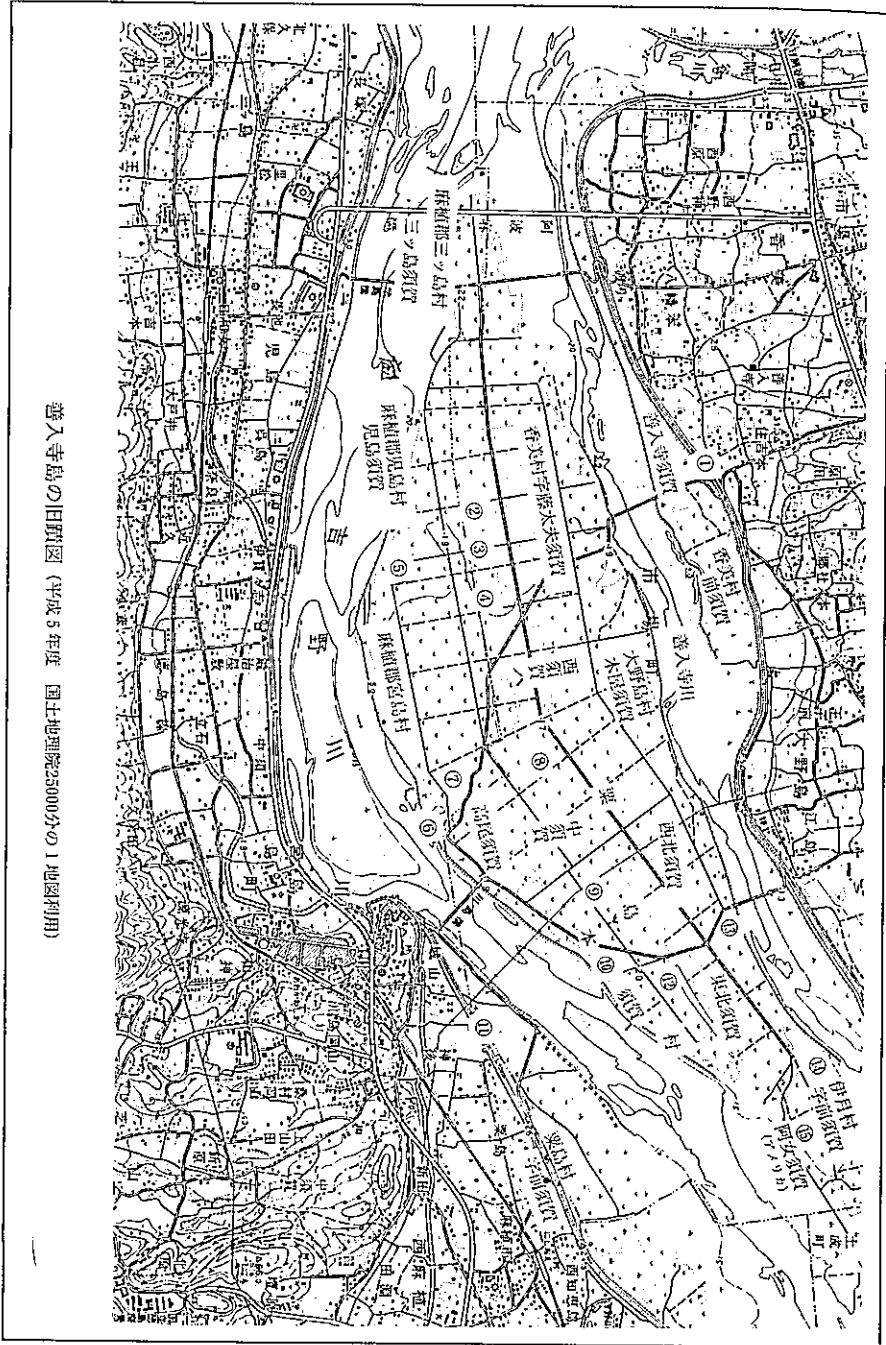
多喜郎が座長となって次のことを議決した。

- 一 島民の意志に従って設計変更の件を陳情してあるが見込みがないから、土地買上げ価格を高くして買うよう運動すること。
- 一 前記目的達成のため島民連合会を組織すること。
- 一 連合会員の権限を明確にするため規約を作ること。
- 一 この起草委員に大島寛太郎・今川嘉太郎・佐藤永太郎・野口邦次郎・石川儀八郎を挙げる。

このとき、一部の人は、中須賀川以南を遊水地にして、そこに築堤し、善入寺川を埋めて、中須賀川以南の人を移転させようとして立案して強硬に主張するものもあったので、粟島出身の八幡町長野口邦次郎の苦心は一方でなかった。野口町長のような有識者は、もし全島の北半を残して南半の人を北へ移転させると、各戸に対する耕地の分配は不公平になるばかりでなく、吉野川幅は善入寺島と川島城山との間が最も狭隘であるから、新堤防がまだ脆弱なときに水庄がくり返されて、村民は再び洪水の都度破壊の危険下に居らなくてはならないという理由で全島移住を主張し、大部分の人もその意見であった。(八幡町史)

しかし、その後、内務省官吏の一人が設計変更を口にしたことから事態は紛糾を極め、この問題が解決したのは明治四十五年二月のことであった。

原内務大臣・床次次官・水野土木局長は渡辺徳島県知事と会合審議の末、吉野川改修中の善入寺島問題は遂に旧設計に復し遊水地とするに決し、その旨関係者に通告し運動者は本日帰県した。
(徳島毎日新聞) 明治四十五年二月十八日付



善入寺島の旧蹟図 (平成5年度 国土地理院25000分の1地図利用)

なお明治四十二年十二月、島民連合会ができ、翌年二月五日粟島小学校で創立総会を開いて一五〇円の予算を組み、役員を次の通り選任した。

顧問	江東多喜郎
会長	大島寛太郎
副会長	佐藤永太郎
幹事	今川嘉太郎 後藤田常太郎 杉野 鶴一
	杉野国三郎 吉永 勘平 牧野 龍吉
	石田儀八郎 中西利之吉 中西高太郎
	高岡 半平 石田 丞平 大塚徳太郎
會計	中 幾三郎
事務長	野口邦次郎

役員は運動に尽力し、なるべく早期に且つ高価に土地を買収されるのが急務であるとして、代議士や県議員に働きかけ、明治四十五年四月十二日に内務省は土地買収価格を次の通り決定した。

宅地一反歩	四五〇円
上畑一反歩	一八〇〜一九〇円
下畑一反歩	一一〇〜一三〇円
竹林一反歩	一七〇〜一八〇円

この価格については、安過ぎ買収に應ずべきでないとして、たびたび島民大会を開き、陳情書提出、陳情委員上京等を重ねたが効果なく、六、七月頃には大多数の島民は指定価格で買収に応じた。

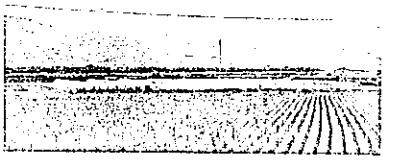


移住前の善入寺島の遠景 (一部)
大塚唯士提供

りに無料で耕作を続けていた。ところが大正十四年三月三十一日になって、大正十四年度から占用料(耕作する土地料)を賦課されることになった。そこで陳情書を作って知事に提出した。

5 吉野川改修工事完了

多年の念願であった吉野川改修の大事業が昭和二年に完成し、水害を免れることとなった沿岸住民の喜びは測り知れないものがある。ただ、善入寺島民の立退きだけは忘却できないが、その後も起こる大洪水を見る限り、誰もが、貴重な人命や家屋家財の流失を免れ得た価値の大きさを感している。



現在の善入寺島の一部

内務省大阪土木出張所の「吉野川改修工事概説」は、その中で次のように記している。抜粋して掲げる。

改修ノ効果

- (前略)
- 一、改修區域内ニ於テ既往ノ浸水面積一萬五千ヘクタール(二萬五千町歩)ノ内大部分ハ全然冠水ヲ免レ其避ケ難キ一部ト雖モ著シク被害ヲ緩和セラルレ災害ニヨリテ年々蒙リシ莫大ノ損害(年平均百萬圓)ヲ除滅セラル。
- 又堤内田畑地價ノ増進ハ蓋シ莫大ノ額ニ上ルベシ。
- (中略)

付され、続々と他町村に転住した。翌三年末迄に転居したのは一〇〇余戸であった。

大正四年九月二十二日付「徳島毎日新聞」は次の通り報じている。

善入寺島民の立退き期は既に経過せるに拘らず今尚立退きをなさざる者あるにより、内務省は強制をなさず其のままとなし(中略)工事により危害を生ずるも自己の過失に外ならざれば(中略)関係郡村及び所轄工区へ通報することなれり。

3 島民の移住先

島民はどこへ移住したか。移住者全部にわたる資料は無いが、川島町の城山に建つ移転之碑には、当時、川島町区域に居住していた善入寺島民の氏名と転居先が刻まれている。それによれば川島町が最も多く、学島村・西尾村・森山村・鴨島町・市場町・牛島村・大阪市の順になる。さらに徳島市・加茂名村・浦庄村・川田村・穴吹村・八幡町・大俣村・久勝村など広範囲である。北海道や朝鮮へ行つた人もある。市場町区域の住民も同じような傾向と考えられる。

4 善入寺島占用料 賦課と陳情

善入寺島の土地の前所有者で、移転はしたが耕作できる者、つまり島へ通える者は、最初の約束通り



川島町城山に建つ移転碑

- 一、掘鑿剩餘土ヲ以テ民有地埋立ニ利用シ其成工面積二百ヘクタール(二百町歩)ニ達セリ。又善入寺島ハ全部遊水地トシテ買収セシモ冠モ土地ノ利用ヲ失ハズ地方ニ於テ占用耕作ヲ繼續シ常時相當ノ収穫ヲ得ゲツツアリ。(後略)

四 朝鮮・北海道への移住

明治から大正へかけて、政府は北海道・朝鮮・台湾等への移住を奨励し、県下各地で講演会等が行われ、各地からこれに応じる人もあった。そのため、粟島を立退く人の中には、こうした土地へ行こうかと思つ人もあった。

1 朝鮮への移住

吉野川改修工事による善入寺島民の立退きに関連して、明治四十四年の夏、島民の朝鮮へ集団移住の議が起こった。そして次のような経過であった。

明治四十四年七月、梶浦阿波郡長、野口八幡町長、大島善入寺島連合会長、今川同会幹事等は視察のため朝鮮へ行つてきた。その翌年、明治四十五年三月、島民中で朝鮮移住を希望する者が、朝鮮移住組合を作って大島寛太郎を組合長にした。そこで大島は今川嘉太郎と明治四十五年五月再び朝鮮へ渡り、兩人の名で朝鮮総督府に土地貸与の手続きをして帰郷した。翌年の大正二年五月、朝鮮総督府から、京畿道高陽郡本島草坪の六百町歩貸下げの許可があった。それで八月に大島と今川は佐藤永太郎と共に三度渡鮮して右の土地を受取った。名は貸下げであるが、十年間に開拓して耕作を続けると土地の所有が保証されていた。